

秩父神社社報 柞乃杜

秩父神社社報
柞乃杜(ははそのもり)

第 53 号

平成28年7月20日
(川瀬祭)



きら
きらと
様がえる
御渡興神

蒼洋

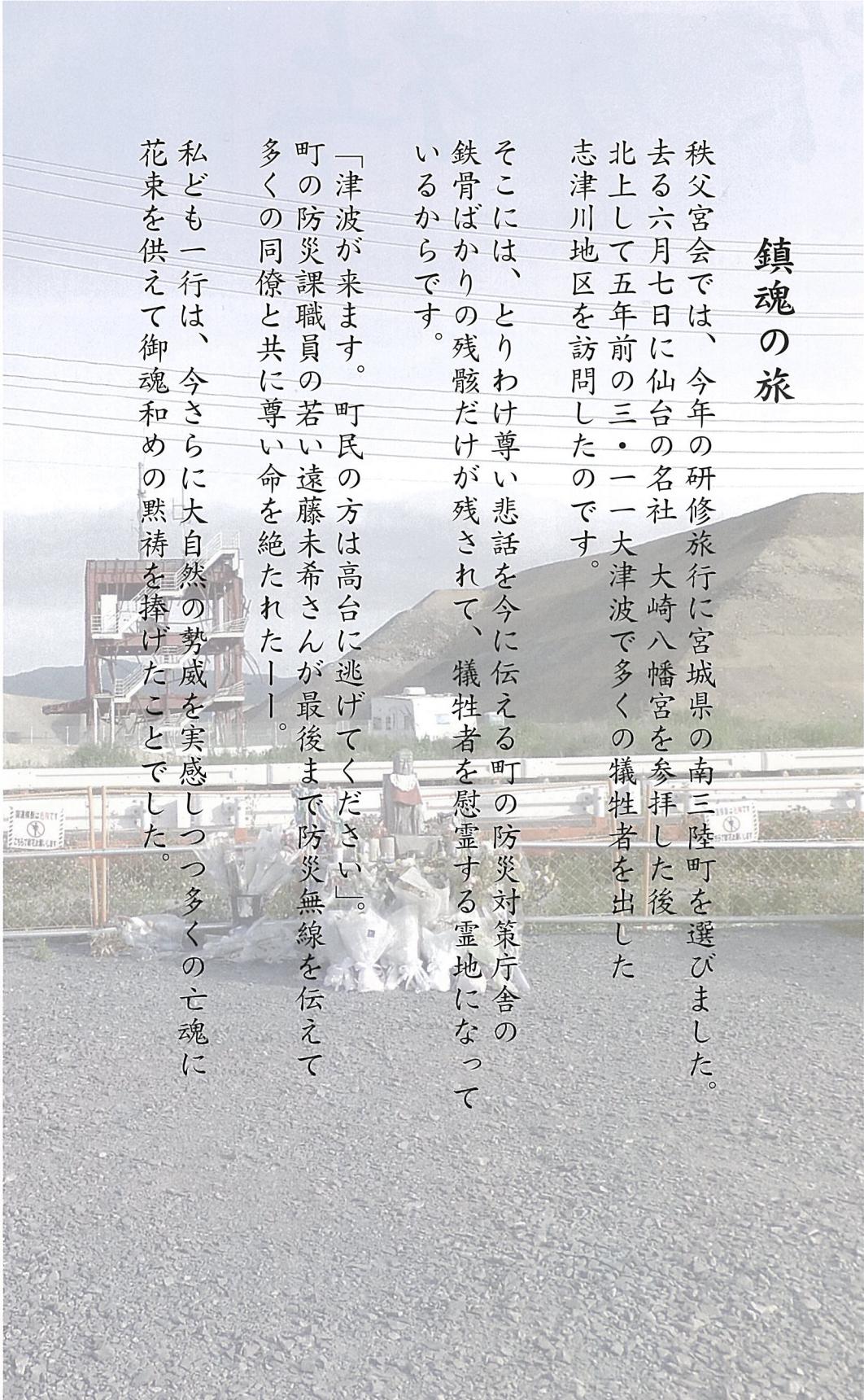
鎮魂の旅

秩父宮会では、今年の研修旅行に宮城県の南三陸町を選びました。去る六月七日に仙台の名社 大崎八幡宮を参拝した後 北上して五年前の三・一一大津波で多くの犠牲者を出した志津川地区を訪問したのです。

そこには、とりわけ尊い悲話を今に伝える町の防災対策庁舎の鉄骨ばかりの残骸だけが残されて、犠牲者を慰靈する靈地になつてゐるからです。

「津波が来ます。町民の方は高台に逃げてください」。町の防災課職員の若い遠藤未希さんが最後まで防災無線を伝えて多くの同僚と共に尊い命を絶たれたーー。

私ども一行は、今さらに大自然の勢威を実感しつつ多くの亡魂に花束を供えて御魂和めの黙祷を捧げたことでした。



解説 秩父神社(52)

権 票 宜 甲田 豊治

◆「武甲山」

今年の例大祭「夜祭」には、御鎮座式千百年奉祝記念事業の第一期として、斎場整備が完了する。昨年新たに「亀の子石」に二基の鳥居が前後に整備される。前方の鳥居は「亀の子石」に、そして後方の鳥居は神奈備山である。「武甲山」を臨むように配置される。

前回解説したこの斎場「亀の子石」の制作年代は、凡そ二百年前の文化十二年(一八一五)。現在の「武甲山」の山容より遙かに迫力があり雄大な姿を呈していたに違いない。その当



谷 文晁 「日本名山圖会 天・地・人」

藤文麗に師事。その後、北宗画・古土佐派・琳派・円山派・四条派・南画等様々な画風を学ぶ。三十歳の時、白河藩主松平定信に認められ近習となる。旅好きで知られた文晁は、その間に日本全国を巡り諸国の名山を写生している。

この事がきっかけとなり、奥州南部出身の医師で、旅と諸国山々(特に富士山)を愛した川村錦城(寿庵)の依頼により私家版に近い「名山圖譜三巻」(当時の蝦夷から九州に至る八十八座の名山を収録)が上梓される。その後、「日本名山圖会 天・地・人」(文化九年)として江戸・京都・大阪の版元から同時に上梓されるほどの人気であつたと伝わっている。

このなかで、武藏國で唯一一名山として撰ばれたのが武藏州秩父郡「武光山」と記されている。「武甲山」である。ご覧いただくと現在の私たちが思い描く姿と文晁が描く山容には、感覚に多少の相違を感じられるかもしれません。

秩父順礼之縁記
絵入秩父巡礼独案内記
著 円宗・静觀 延享二年
秩父獨案内 著 橋本徳瓶 文化十年
秩父順拝記 著 竹村立義 文政六年
印籠譜 坪 著 森玄黄齋 天保十年

正徳四年

しれないが、独立峰を強調したその姿と手前に広がる風景は当時の「武甲山」を窺い知ることができる貴重な資料である。又、埼玉県立図書館地域・行政資料(埼玉資料)デジタルライプラリーに、江戸後期の秩父(信仰)に関する資料が見える。



「秩父順拝記」
(埼玉県立図書館所蔵資料)

などの中に「武甲山」の山容を確認することができる。その資料中、竹村立義が著した「秩父順拝記」は特に興味深い。県立図書館資料によると、竹村立義は江戸時代の紀行家で、新芝橋の北街(現在港区田町付近)に住み、裁縫を生業としていた。文政三年(一八

二〇)に秩父の旅へと出発。所沢、飯能、吾野、子ノ権現、秩父、熊谷と巡る旅であり、その様子を文政六年(一八二三)挿絵入り紀行書として六冊の和本にまとめたのが「秩父順拝記」である。ここに掲載した「秩父順拝記」の挿絵には、迫力ある「武甲山」の山容をはじめ、「二子山」「八番札所」「城山」「横瀬の内白や」「横瀬の内桜こや」の位置や当時の街並みも確認できる。

注目すべきは、「武藏鑑」を引用し、この地域を解説していることである。前号において妙見を「子の神」と表現した福島東雄著「武藏鑑」を、竹村立義は既に目にしていたのではなかと考えられる。実は、「武藏鑑」の中にも、著者である福島東雄は「武甲山」について詳しく述べて頂いている。興味のある方は是非調べて頂きたい。

以上今回、江戸後期に見える「武甲山」の山容を二つの資料を例に述べてみた。江戸後期の大ベストセラー「日本名山図絵」、そして江戸在住の紀行家が記した「秩父順拝記」。そこに描かれた「武甲山」は、それぞれに雄大且つ大変凜々しい姿であつた。

今、私達の目の前に聳える「武甲山」の山容は、近・現代における開発によって急速に変化してしまったことは大変悲しいことである。しかし、武甲の「山ノ神」に対する感謝の心は変わることなく子々孫々へとその信仰はこれからも大切に受け継ぎ伝え継がれてゆくのである。

神社の「公共性」を考える

宮司 薦 田 稔

近ごろ弊社の御鎮座二千百年を記念する奉祝事業に携わるなかで、改めて我が国社会における神社の在り方について深く考えさせられることの一つに「公共性」の如何ということがあります。本地元住民の皆さんはよくご承知のように、弊社は、それこそ有史以前から秩父盆地に土着した古代人たちが、生業を営むなかで土地の自然環境を風土化しつつ、併せて武甲山に見立てた靈性に祈りと感謝の祭りを捧げてきました。その遙拝祭祀の神域でした。

ですから、御鎮座二千百年という由緒は、『先代舊事本紀』という平安時代の古典に所収の『國造本紀』に記載される「知知夫國」の記事に、第十代崇神天皇の時代に國造に任官された知知夫彦命が神祖の八意思金神を拝祠されたとある文章と、『日本書紀』卷第五の崇神天

皇十年九月九日条に記す四道將軍派遣と翌十一年夏四月廿八日条の將軍たち凱旋と異族帰順の記事とを勘考して、今から二千百年ほど前に当社が初めて古典古代の神格を獲得したということになります。しかし、この由緒が歴史よりも神話的伝承年代であることはともかく、当社存立の性格が古代以来、当初の「知知夫國」から武藏國「秩父郡」となる秩父盆地一帯の總鎮守社であつたことから、その後中世から近世の神仏習合時代に

「秩父大宮妙見宮」を経たにしても、現代に至るまで終始一貫、地域全体の宗教的「公共性」を体现してきたのです。



近現代に用いられる「公共性」という概念は、考えてみれば明治以来の近代国家の法政体制に独占されてしまい、かつて近世幕藩体制下の藩政や郷村社会の内部に機能していた「公(おおやけ)」と「私(わたし)」とが解体され、法政的には国政と地方行政団体とが公共性に帰属し、郷村社会や町内組織など民間の伝統集団の内部的公共性は、個人の尊厳重視を理由に顧慮されなくなりました。

なかでも憲法における「宗教」規定は、第二〇条に「信教の自由」とあるように専ら宗教の教義を信じるという、いわば個人信仰とみなす狭い定義にして、結果的には宗教全般をすべて私的、個人的あるいは排他的、独善的な営みとも見做しかねないところから、従来から等しく宗教法人と認証されている全国八万余の神社とその祭礼も、私的信教の宗教団体と見做されて、本来の地域社会における「公共性」は国法上無視されているのです。



ところが近年、欧米にも主に社会哲学や政治哲学の分野で新たなコミュニケーション(地域社会)の積極的再評価を提案し、検討する学問的動向が高まり、日本でもその動向に呼応する学者たちが我が国の伝統的地域社会の公共性に着目するなかで、実際に神社と氏子社会の在り方を再評価する研究者が出ていたことを知りました。国際的には、コミュニケーションズムと



柱立て神事

ところが近年、欧米にも主に社会哲学や政治哲学の分野で新たなコミュニケーション(地域社会)の積極的再評価を提案し、検討する学問的動向が高まり、日本でもその動向に呼応する学者たちが我が国の伝統的地域社会の公共性に着目するなかで、実際に神社と氏子社会の在り方を再評価する研究者が出ていたことを知りました。国際的には、コミュニケーションズムと

いう名称の学問的運動で、その発端は歐米の普遍的な個人本位の自由主義論者たちが極端に人間の社会的・文化的存在性の実態を無視して西欧的文明のグローバル化を標榜するのを実証的に反論して、現に内部崩壊を来たしつつある欧米社会を再生するには、弱体化したコミュニティを本来の共同体に再構築するにしくはないとして活発な活動を展開している

○

実は、つい先日、私を訪ねて来社された千葉大学教授のK先生が社会哲学の立場でこの魅力的なコミュニティ論を専攻されている方



川瀬祭宵宮

【表紙絵解説】



この度の表紙絵画は、平成二十七年度第4十五回武甲山国画展において、埼玉県知事賞

を受賞した秩父第二中学校三年、笠原玲音君（現在秩父農工科学高校一年）の作品を掲載させて頂きました。

稲穂がすくすくと育つ棚田の後ろに悠然と聳える武甲山。正に天の恵み、地の恵み、水の恵みが見事に描かれています。武甲山には三歳の時に初めて登った

のが思い出との事。市内上町にお住まいでの夏祭りには毎年、上町の屋台の曳き子で積極的にご参加頂いております。今も絵を描くことが大好きで、興味があると話していた笠原君。今後益々のご活躍を期待しております。

【表紙歌解説】



さらさらと裸が光る神輿渡御

岩田蒼洋（そうよう）本名、岩田丈五郎。明治七年、久那坂本に旧家の次男として生まれた。苦学して西洋医学を学び、明治三十六年、番場通りに「岩田医院」を開業した。貧しい人、恵まれない人に対しても誠実に医療を施す「赤ひげ先生」であった。

蒼洋は傍ら、豊かな詩情を備え持ち、自然や人物を鋭い観察眼で吟句した。残された多くの句には、人情味豊かで朴訥とした性格が滲み出している。
今年の川瀬祭りには是非、神輿の後をついて武之鼻まで行つてみてください。まさにこの句と同じ光景を見る事ができるでしょう。
※今回の歌題字は蒼洋の孫にあたり、当社前奉賛会長井上 久様令夫人の英子様に書いて戴きました。

でして、偶々日本での神社・神道の社会性をテーマに出版するに当たって、私が専攻してきた宗教文化論と神社祭祀に関する家郷社会論に痛く共鳴されてインターネットに来られた際に、この嬉しい研究動向を紹介して下さったのです。

いつたんは日本の中近世に成熟した家郷社会が、明治以来の国家近代化的過程で解体の一途を辿るなかで近年は「無縁社会」と化しかねない時勢に、何とか伝統に根差した地方コミュニティを再構築

秩父宮会研修旅行報告

権禱宣 伏見 博樹



大崎八幡宮前にて

関東地方が梅雨入りを迎えた六月七日～八日、秩父宮会の研修旅行に同行させていただきました。

「杜の都」の脹わりをとりもどした仙台市、沿岸部にて津波による甚大な被害を被った南三陸町を訪れ、復旧復興の現場に臨み、あらためて災害の記憶を心に留め、被災地域の人々と心を同じにするべく東北の地へと向かいました。

一行は仙台に到着後、先ず大崎八幡宮を参拝しました。藩祖伊達政宗公創建による御社殿は、安土桃山時代の遺構として国宝建造物に指定されています。

一時は仙台に到着後、先ず大崎八幡宮を参拝しました。藩祖伊達政宗公創建による御社殿は、安土桃山時代の遺構として国宝建造物に指定されています。

その後南三陸町沿岸部へと向かいました。津波で損傷した建物、ガレキの山は消え、平野を埋め尽くすよう位に盛土が連なる谷間に佇む、防災対策庁舎前に設けられた献花台に供花、一同に哀悼の意を捧げました。

幾多の災害が起こるたび、改めて私たちが厳しい自然環境の中にあることを実感させられます。何でもない日常があっけなく元にもどらなくなることや、失つて気付く平穏な日常、その得難さを心に刻み込み、復旧復興の現場の一隅に掲げられた「むかし懐かしい未来への言葉に、これからも続くであろうふれと再生に思いを馳せる研修旅行となりました。



参拝後の小野目宮司様の講話

災発生時は長く続く強い揺れに数々の損傷を受けたものの被害 자체は最小限にとどめられ、余震が続く中、宮司以下職員一丸となつて隣接する避難所への飲料水の供給や救援活動を行つたそうです。現在でも沿岸部の被災神社復旧復興支援活動を継続中との事で、脱帽の思いにて拝聴いたしました。

就任挨拶

氏子青年会会長 井深 昭



平成二十八年度総会におきまして、会員の皆様のご承認を頂き第十一代会長に就任致しました、熊木町の井深昭です。

新体制のもとに始動しました氏子青年会の活動におきまして、まずは「秩父神社を中心とした、熊木町の井深昭です。」を目的に、そして「地域の境無く皆が仲良く活動できる会であること」を目標に掲げさせていただき、これから氏子青年会の後継者育成に結びつくような新しい試みを開拓できればと思います。むすびに会員皆様方のご協力、協力会の方々のお力添えをお願いし、併せて吉田前会長の御慰労を申し上げまして新役員を代表してのご挨拶に代えさせていただきます。

退任挨拶

氏子青年会前会長 吉田 恵一



去る五月二十六日、平成二十八年度秩父神社氏子青年会総会に於きました。期の職を退任致しました。

一期二期の在任期間中は、折しも秩父神社御鎮座二二〇〇年の佳節とも重なり、当会役員をはじめ会員皆様方のご理解、ご協力により奉祝事業計画の一端を担当させていただきましたこと、大変に嬉しく思っております。

また、昨年の九月には会員視察研修として「亀の子石」の製作現場を訪れ、筑波山を背に秩父への里帰りを待つ新旧二代の影像を拝見できた事は深く印象に残っています。

これから井深新会長のもとスタートした氏子青年会活動に際し、在任中の経験を活かしながら今後も精一杯の応援をさせていただきます。むすびに御関係皆様方のご健勝とご多幸を、そして秩父神社様の益々の隆昌を御祈念申し上げ、この度の退任の挨拶とさせていただきます。

梶だより



お詫びと訂正

前回配布致しました御奉賛名簿に誤りがございましたので、ここに訂正させて頂きお詫びを申し上げます。

神社扱い

七万円 関根 次郎
二万円 吉崎 正明
一万円 吉崎 よね子・吉崎 喜美代
五千円 高柳 妙順・高柳 智洁
一万円 丸岡 茂・納富 隆裕
十万円 米沢 えいこ・中 三奈
五万円 篠田 雄一
一万円 本町青年部・萩原 克憲
十万円 関田 勤・持田 智弘
一万円 豊田 茂伸・新井 守

本町地区

五千円 篠原クリーニング
一万円 駿前高砂ホルモン
一万円 玉木家
一万円 東町地区
一万円 金室町地区
五千円 中宮地町地区
一万円 根岸 文晴
五千円 浅賀 規男・堀田 充
一万円 中村 慶一
一万円 高浜彰男講元外五十四名
六月十二日 辻 正講元外百八十三名

宮本町地区

五千円 宮下 清子

巴町地区

五千円 弘之

旭町地区

五千円 児玉 義丈

下山田地区

五千円 福島 一衛

大田上地区

一万円 新田 恭一

下蒔田地区

五千円 島崎 光晴

秩父神社妙見講

自 平成二十八年二月
至 平成二十九年二月

二月七日 坂戸妙見講
二月十三日 拝域講

四月十一日 小川直志講元外三十九名
四月二十一日 田島義昭講元外三十七名
五月十日 鈴木建志講元外五十三名
五月十五日 宮前喜久江講元外二百十名

五月二十日 中西貞夫講元外五百一名
五月十五日 近戸講
五月二十二日 中宮地講
五月三十日 大野昭二講元外百九十八名
六月十二日 幸手妙見講
高浜彰男講元外五十四名
辻 正講元外百八十三名

六月十八日 下宮地講

根岸久雄講元外六十九名

六月十八日 別所講

富田悦之講元外八十七名

六月二十五日 稲葉富司講元外百十四名

深田章蔵講元外百七十三名

六月二十六日 下郷講

浅見佳久講元外三百八十三名

六月二十六日 下郷講

深田章蔵講元外百七十三名

六月二十六日 下郷講

浅見佳久講元外三百八十三名

◆柞乃杜神前結婚式報告

本年より 熊木講辻 正様 別所講富田
悦之様が新に講元に就任されました。どうぞ宜しくお願ひ致します。

蕨市塚越 秩父市下宮地町
東京都世田谷区
秩父市大野原
秩父市下影森
秩父市桜木町
東京都中野区
秩父市荒川白久
千葉県市川市
秩父市時田
東京都板橋区
秩父市時田
皆野町皆野
小鹿野町飯田
深谷市上柴町西
栃木県足利市
神奈川県横浜市
秩父市熊木町
未永く幸せな家庭をお築き戴きますよ
お祈り致します。

役	相談役	顧問	名譽会員
長	前会長	会長	会長
幹事長	副幹事長	副幹事長	幹事長
事務部長	副事業部長	副事業部長	事務部長
監	監	監	監
常任幹事	常任幹事	常任幹事	常任幹事
十九名	十九名	十九名	十九名
柿新伏守田飯塚松手今坂浅長佐田澤池内中小関町栗大山井吉島新新井丸岡嶋裕一郎清行(禰)中(中)町町町町町町	柿新伏守田飯塚松手今坂浅長佐田澤池内中小関町栗大山井吉島新新井丸岡嶋裕一郎清行(禰)中(中)町町町町町町	柿新伏守田飯塚松手今坂浅長佐田澤池内中小関町栗大山井吉島新新井丸岡嶋裕一郎清行(禰)中(中)町町町町町町	柿新伏守田飯塚松手今坂浅長佐田澤池内中小関町栗大山井吉島新新井丸岡嶋裕一郎清行(禰)中(中)町町町町町町
祐賢	祐賢	祐賢	祐賢
伴博通 正亮	伴博通 正亮	伴博通 正亮	伴博通 正亮
実郎明樹夫真之一剛孝修	実郎明樹夫真之一剛孝修	実郎明樹夫真之一剛孝修	実郎明樹夫真之一剛孝修
(道番中権(中)神(中)福(中)宮)	(道番中権(中)神(中)福(中)宮)	(道番中権(中)神(中)福(中)宮)	(道番中権(中)神(中)福(中)宮)
生場村宜地木町町地村木地側場町町町保町村町木町町木町	生場村宜地木町町地村木地側場町町町保町村町木町町木町	生場村宜地木町町地村木地側場町町町保町村町木町町木町	生場村宜地木町町地村木地側場町町町保町村町木町町木町

◆氏子青年会武甲山登拝

五月二十九日(日) 氏子青年会恒

例行事の
「親子で
登る武甲
山登拝」



◆「河瀬夏祭護符」のお知らせ

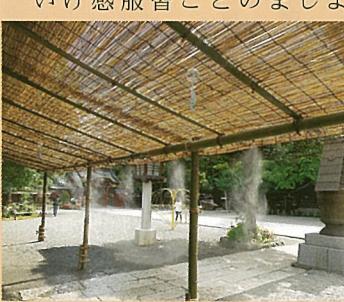
から約二時間半かけての登頂となり、山頂の御嶽神社にお参りをして親子の絆も深まる登拝となりました。来年も大勢のご参加をお待ちしております。

生川の登
山口広場

好の日和
で横瀬町

此の度、川瀬祭りに際しまして、特別奉製した「河瀬祭護符」と「限定団扇」を整えましたのでご案内致します。団扇は古来より病魔などを撃ち祓う魔除けの意味もあつたと言われております。当社の川瀬祭りは悪疫退散・無病息災のお祭りです。穢れは気枯れから来るものだと伝えられております。

今年の夏はこちらの護符で家を守



近年、日本の伝統文化が見直され、参拝の中には、神社の神苑に入ると心が癒されるという声も寄せられ、多くの皆様にご参拝を頂いております。季節は夏へと変わり、厳しい暑さが心にも身体にも堪えてまいります。そこで当社では、この度境内授与所にミストを設置いたしました。

昨年より設置しております

す。桜川のミストと共に、ご

殿の花木の御印である若松・菊の流儀花や盛り花、投入れ花で平成殿や天神地祇社回廊が彩られました。

「いけばな展」開催中は天候にも恵まれ、秩父宮祭にご臨席頂いた松平恒忠様（秩父宮妃勢津子殿下甥御様）を始め秩父を訪れた多勢の方々にご覧頂きました。

◆涼を誘うミスト設置

り、団扇で身を護り戴きたいと限られた。定頒布を致します。授与所までお問い合わせ下さい。下さい。

当社権利の守屋通夫（華名・宗通）が家元を務める華道・松月古流により、去る五月三日～五日、一昨年御鎮座二千百年を迎えた当社の奉祝と本年の秩父宮祭に献花を兼ねての「いけばな展」が開催されました。

当社権利の守屋通夫（華名・宗通）が家元を務める華道・松月古流により、去る五月三日～五日、一昨年御鎮座二千百年を迎えた当社の奉祝と本年の秩父宮祭に献花を兼ねての「いけばな展」が開催されました。

約五十杯の作品には、秩父宮両殿下の花木の御印である若松・菊の流儀花や盛り花、投入れ花で平成殿や天神地祇社回廊が彩られました。

新鮮な野菜や果物、県産米等を販売する恒例の妙見朝市が開催されています。参拝を兼ねて是非一度立ち寄りください。

■前号にて、この夏号の神社解説に明治時代から伝わる絹文化遺産である「漱盥器」についての解説をお届けする予定でしたが、名簿確認に時間を要するため次回以降に掲載を考えております。ご了承下さい。

■前号掲載しました武甲山写真奉納者、清水武司様のお名前に間違いございました。ここに訂正しお詫び申し上げます。

■宵宮の天王柱立て神事も平成十三年より今年で十六回を数え、天王様の御子と同数である八町会の青年行事長が見事に柱を立ち上げ、厄除退散を祈る川瀬祭りを迎え、ここに社報杵乃杜第53号をお届け致します。

■境内に於いて、地元で朝採りした新鮮な野菜や果物、県産米等を販売する恒例の妙見朝市が開催されています。参拝を兼ねて是非一度立ち寄りください。

◆奉祝いけばな展開催

編集後記



※ 本報の用紙は再生マット紙を使用しています。

平成二十八年(2016)七月二十日

編行集秩父神社社務所
〒356-0044 埼玉県秩父市番場町一-13
TEL(049)231-0262
FAX(049)241-5596
印刷所 有限会社 拡文社 印刷所
〒356-0044 秩父市東町二-71-8